

答え合わせ・解説

問1	答え 2 銀	18世紀、イギリスでは喫茶の習慣が広まったことで、清から「茶」を大量に輸入するようになりました。しかし、当時の清はイギリスの工業製品を必要としなかったため、イギリスは代金として大量の「銀」を支払う必要があり、これが大幅な貿易赤字の原因となりました。
問2	答え 1 安政の大獄	井伊直弼は幕府の権威を立て直すために、反対派を徹底的に排除する強硬策をとりました。この弾圧によって吉田松陰らが処刑されましたが、幕府への反感はかえって強まり、のちに井伊自身が暗殺される桜田門外の変へとつながりました。歴史の大きな転換点となった重要な政治的事件です。
問3	答え 1 北海道の箱館と、伊豆半島の先端付近に位置する下田	アメリカのペリーと江戸幕府が結んだ日米和親条約により、アメリカ船に薪水や食料を供給することを目的として、下田（静岡県）と箱館（北海道）の2港が開港されました。長崎は江戸時代を通じてオランダや清との貿易が行われていた港であり、この条約で新たに開かれたものではありません。また、横浜や兵庫などは後の1858年に結ばれた日米修好通商条約によって開港が決められた港です。
問4	答え 1 日米修好通商条約 — 井伊直弼	大老の井伊直弼は、反対派や朝廷の意向を押し切り、勅許を得ないまま日米修好通商条約に調印しました。水野忠邦は江戸時代後期の天保の改革を行った人物であり、勝海舟は幕末に海軍の育成や江戸城無血開城に尽力した人物です。また、1854年の日米和親条約はペリー来航時に結ばれたものであり、貿易を認めた1858年の条約とは異なります。
問5	答え 1 薩英戦争が発生したが、この戦いを通じて薩摩藩は武力による攘夷の困難さを痛感し、イギリスへの接近や軍制の近代化へと方針を転換した。	1862年の生麦事件をきっかけに、1863年に薩摩藩とイギリスの間で薩英戦争が勃発しました。薩摩藩はこの戦いでイギリスの圧倒的な軍事力を目の当たりにし、それまでの「攘夷（武力で外国を追い払うこと）」が不可能であることを悟りました。これを機に、薩摩藩は敵対していたイギリスと急接近し、武器の購入や軍隊の近代化を進めることで、後の倒幕運動の中心勢力へと成長してきました。選択肢にある下関戦争は長州藩が関わったものであり、下関条約は日清戦争の講和条約です。
問6	答え 1 1792年、ロシアのラクスマンが漂流民を連れて根室に来航し、通商を求めた。	ロシアは18世紀末から極東への関心を強め、ラクスマンが根室に来航したことで、長年続いてきた幕府の対外政策に揺さぶりをかけました。幕府はこれに対し、松前藩などの北方警備を強化するとともに、特定の港以外での交渉を拒否する姿勢を維持しました。その後の1825年には異国船打払令が出されるなど、当初は強硬な対応が主流となりました。
問7	答え 1 イギリス — 生糸	幕末の貿易において、日本が最も多く取引を行った相手国は、当時「世界の工場」と呼ばれ圧倒的な工業力を誇っていたイギリスでした。横浜港を窓口として、日本からは生糸や茶が輸出され、イギリスからは産業革命によって大量生産された綿織物や毛織物などが輸入されました。特に生糸は、横浜港の輸出総額の8割以上を占めるほど重要な品目であり、対英貿易の中心となっていました。
問8	答え 1 王政復古の大号令	徳川慶喜が大政奉還を行った後も依然として強い影響力を持ち続けることを警戒した薩摩藩や長州藩、岩倉具視ら倒幕派は、クーデターを断行しました。これにより幕府の廃止と天皇を中心とする新政府の設立を宣言したのが王政復古の大号令です。これに反発した旧幕府側との間で、その後に戊辰戦争が勃発することになります。
問9	答え 1 水野忠邦が株仲間の解散や人返しの法などを含む天保の改革を実施した。	大塩平八郎の乱（1837年）による社会不安や飢饉に対応するため、1841年から水野忠邦によって天保の改革が行われました。その後、1853年のペリー来航、1858年の日米修好通商条約調印、1860年の桜田門外の変へと続きます。1860年には万延元年の遣米使節も派遣されていますが、国内の政治的混乱はこれ以降さらに激化することになります。